

広報

第14号

2014年
(平成26年) 8月

目次

ご挨拶	1
新任教授・准教授紹介	4
受賞	11
行事紹介	17
歯学研究科・教室紹介	25
特別寄稿	28
北海道大学病院歯科診療センターのご案内 ..	33
編集後記	35

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部・歯科診療センター



理学部から見た歯学部全景（中央）

研究科長・学部長就任に際して



北海道大学大学院・歯学研究科長・歯学部長
口腔機能学講座口腔機能補綴学教室教授

横山 敦郎

北海道大学歯学研究科・歯学部・歯科診療センター 広報 第14号をご覧くださいありがとうございます。本年4月1日から歯学研究科長・歯学部長に就任致しました横山と申します。北大歯学部の12期生として昭和59年に卒業し、今年卒業30年になります。専門は補綴歯科学（「ほてつ」と読みます）で、義歯（入れ歯）やデンタルインプラントに関する教育・研究・臨床を担当しております。

皆様もご存知の様に、北海道大学歯学部は昭和42年に設立された北海道大学の15学部の中で最も新しい学部ですが、あと3年で創立50周年を迎えようとしております。

北大歯学部の現状についてご紹介させていただきますと存じます。

昨年10月、歯科診療センターが北大病院新棟2～6階部分に移転しました。医科外来の東側に隣接しており、本当の意味での病院の医科歯科統合となりました。診療のためのユニット（歯科診療台）数は193台から120台に減りましたが、各ユニットの間が広くなり、パターションで区切られた空間で患者さんもゆったりとした気分で診療を受けることができるようになりました。さらに、各種モニターを備えた新しいユニットも配置されています。

歯学研究科・歯学部も、数年前に東側のD棟の耐震改修を終え、昨年春から研究科・学部の

中央に位置し最も広い面積を持つC棟の耐震改修が始まり、来年5月には、すべての改修を終え、探索医療研究室、多目的会議室、臨床前実習室、PBL (Problem Based Learning) のための部屋、リフレッシュラウンジなども備えた新しい研究棟に変わろうとしています。

昭和42年の創立当初から歯学研究科・歯学部を牽引し続けてきた本学一期生、二期生が定年により大学を去り、歯学研究科教授会の構成員は大きく変わりました。昨年11月「国立大学改革プラン」、今年4月に保健系〔歯学〕の「ミッションの再定義」が発表され、北海道大学歯学研究科・歯学部を取り巻く状況は大きく変化しつつあります。また、残念なことではありますが、歯科医師国家試験の合格率の低下と国試浪人の増加、歯科診療センターについては、増収といった問題にも直面しております。その中で、我々は、「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」という4つの北海道大学の理念、さらには先人の不断の努力により築き上げられた実績と伝統のもと、教育、研究、臨床の一層の充実と発展を図るとともに、新しい時代をリードする歯科医師、歯科医学研究者・教育者を養成するに相応しい研究教育体制を構築し、北海道大学大学院歯学研究科・歯学部、北大病院歯科診療センターのさらなる活性化を推進していきたいと思っております。

歯科診療センターが移転しました



北海道大学病院・副病院長
口腔機能学講座歯科矯正学教室教授

飯田 順一郎

中村太保前副病院長の定年によるご退任後に歯科担当副病院長の重責をお引き受けし、昨年、前副病院長が残された1年の任期を終えることができました。その後、再度皆様に推挙いただき、平成25年度から改めて3年の任期をお引き受けしました。平成25年度を終え皆様のご協力の元で、歯科担当副病院長として合わせて2年が経過しました。その間、昨年の9月には、皆様ご存知の通り、北大病院外来新棟の建物が医科外来棟に隣接した場所に完成し、10月から歯科診療センターとしてその2階から6階で診療がスタートしました。昭和42年に北海道大学歯学部附属病院としてスタートした我々の病院の歴史の中でも、この外来新棟への移転は特筆すべき変革であると思います。

ご存知のように、旧歯科診療センターは、13条門から大学構内に入った銀杏並木に面して建っていましたが、その建物の老朽化に対する対策として、15年以上前からこれまで、改築するか新築するかと、何度も計画されては実現まで至ることができないでございました。その念願の事業が、このたび外来新棟として新築が実現し、その移転が昨年10月に成就したことは、大変悦ばしい出来事です。

本格的な移転作業は9月末の2週間で行われ、構成員の皆様のご協力のもとで無事終了する事が出来ました。関係者のご尽力に厚く御礼申し上げます。竣工記念式典は、山口北大総長をはじめとして、富野北海道歯科医師会長、また藤田札幌歯科医師会長のご臨席のもとで9月27日金曜日に外来新棟2階の歯科受付前のホールで盛大に挙行され、引き続き関係者の内覧会が行われました。翌日の土曜日には、その日が

北海道大学の同窓生が全国から集まるホームカミングデーでもあったことから、同窓生、一般市民向けの内覧会を行うとともに、小学生向けに歯科医師の仕事を体験する体験会を催しました。この企画は北海道新聞にも写真入りで取り上げられ、子供たちの輝く瞳が印象的でした。また、一般市民に対して北大病院歯科診療センターが新たになった事を広報することを目的として、10月25日に市民公開講座をホテルオオクラで開催し、130名を超える市民の参加を得て成功裡に終えることができました。このように、歯科診療センターがこのたび新装され、外来新棟での診療を開始する事が出来た事は、寶金病院長をはじめとして北大病院のすべての関係者、また大学院歯学研究科のご尽力が無くては実現できなかったものと、厚く御礼申し上げます。またこれは、この新棟新築計画を決定された当時の福田病院長をはじめとした病院執行部、また大学本部の多大なるご努力の成果であり、そのご苦勞に感謝すると同時に心から御礼申し上げます。

このように、めでたく歯科診療センターが新装されましたが、その背景には様々な問題点も残されております。大学本部からは財政的に多大なご援助をいただいたと同時に融資を受けております。これから10年間に亘って病院はその返済をしていかなければなりません。そのために歯科としては毎年相当額の診療報酬請求額の増加を約束しております。平成24年度から、歯科の皆様にはその目標達成のために増収に向けた様々なお願いをさせていただきました。平成24年度においては大幅にその目標額を上回る請求額を達成でき感謝しております。一方で平成

25年度の成績はふるわず、そのため平成24、25年度2年間における目標の達成率は98%という結果になりました。平成26年度に入ってから、今後の歯科の皆様の、今まで以上の努力とご協力をお願い申し上げます。

この外来新棟は、医科外来棟に隣接して位置しています。医科と歯科の連携を緊密に持つ事は、医科にとっても、歯科にとっても、診療の質を向上させるために重要な事だとこれまでも分かっておりましたが、建物が遠く離れている事が障壁となってなかなか充実した連携がとれないでいました。このたびの歯科診療センターが医科外来棟に隣接した場所へ移転したことは、その障壁が一挙に排除された出来事という事が出来ます。

これを機に、北大病院の医療の質の向上に向けて、歯科と医科の医療連携の充実に向けた活動を飛躍的に向上させていきたいと考えています。その手始めに、外来新棟の1階に設置された外来腫瘍センターを受診している患者さんに対する口腔ケアを、積極的に歯科で担当する医療連携がすでに始まりました。3月末には歯科診療センター2階の第一診療室に、新たに医科から歯科へ口腔ケアを依頼する際の窓口となる担当職員（クラーク）を配置して、受付をしやすくする体制をスタートさせました。これまでも、造血幹細胞移植をはじめとする癌化学療法・放射線療法などを受けている患者さんに対する口腔ケア、がん手術、弁置換術、臓器移植などの患者さんに対する周術期合併症予防のための口腔ケア、また術後・気管内挿管時・終末期患者などに対する誤嚥性肺炎予防のための口

腔ケアなど、医科からの要望に対応して歯科から医科の病棟へ往診することや、病棟から入院患者を歯科へ受診させるという形での医療連携は行われてきていました。しかし、そのような患者さんに対する口腔ケアを医科から依頼しようとする際の依頼の窓口が明確でなかったことから、十分に機能できていませんでした。

今回、医科からの依頼を受けやすくするために、その窓口を一本化して明確にし、病院業務連絡会議等を通じて、医科の先生へ周知するとともに、患者に対するパンフレット等を作成し広報したこと等により、今後は医科に受診中の患者さんの口腔ケアが充実し、北大病院における、多くの疾患に対する治療成績の向上に貢献出来るものと考えています。

今後はこれから全身麻酔で手術を受けようとするすべて患者さんの口腔内の健康管理の徹底にも力を注いでいきたいと考えております。そのためには歯科の先生方のご協力、ご尽力をいただかなければならないものと思いますが、宜しくご協力をいただきたいと思っております。また、病院内での医科と歯科との医療連携だけでなく、北大病院は北海道、また札幌周辺の多くの医療施設と連携をとっており、地域医療連携を充実させ、患者の健康増進と福祉に貢献しようとしています。歯科診療センターが新しくなったこの機会に、今まで以上に、他の多くの医療施設の先生方に北大病院歯科診療センターを認知していただき、患者さんの幸せのために協力し合う体制を構築していきたいと考えています。

今後とも北大病院歯科診療センターをどうぞよろしくお願い申し上げます。

新任教授・准教授紹介



北海道大学大学院歯学研究科
臨床教育部門 教授
井上 哲

【略 歴】

- 1982年3月 北海道大学歯学部歯学科卒業（10期）
- 1986年3月 北海道大学大学院歯学研究科博士課程（歯学臨床系専攻）修了
- 1986年4月 北海道大学歯学部助手（歯科保存学第一講座）
- 1989年3月 アメリカ合衆国オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部歯内療法学講座Research fellow（1990年2月まで）
- 1999年3月 ベルギー王国ルーベンカソリック大学医学部歯学科保存修復・歯科材料学講座客員教授（2000年7月まで）
- 2002年5月 北海道大学歯学部附属病院口腔総合治療部講師
- 2013年5月 北海道大学大学院歯学研究科臨床教育部門教授

【就任にあたり】

2013年（平成25年）5月1日付で「臨床教育部門」を担当することになりました井上 哲です。

この部門について説明する前に、まず歯科医師になるためには、どのような難関をパスする必要があるかについてです。〇〇大学歯学部あるいは〇〇歯科大学に入学し、歯学生は6年間の教育・実習を受けます。最初4年間でピシリと歯科医学の知識と技術を修得したのち、5年時で、臨床実習に進むために全国共用の知識試験および技能・態度試験（自動車運転免許での路上へ出る前の仮免許試験に相当）に合格する必要があります。さらに、6年時の卒業直前1月には歯科医師国家試験を受験し、3月に合否が発表され（平成25年度合格率は全国で63.3%）、その合格者のみが歯科研修医となることができ、その後1年間の卒業後臨床研修を修了して初めて、一人前？とは言えませんが歯科医師となることができます。

歯学部卒業前の5・6年生が約1年間、指導医の元で実際の患者さんを治療する臨床実習を

行っていますが、「臨床教育部門」は、そのさらなる充実を図るべく新設されました。近年は、臨床実習に協力していただける患者さんが減少しているのが現状です。この広報誌の読者の皆様方の中で歯科治療の必要な方がいらっしゃいましたら、ぜひ臨床実習に協力していただくと幸いです。一方、卒業直後の歯科臨床研修に関わる諸事を統括することも行っています。これら卒業前臨床実習と卒業後臨床研修は、北大病院の中央診療施設である「口腔総合治療部」と連携・協力して行っています。

北大歯学部の卒業生らしく、全人的に優れ、生涯自主研鑽し、フロンティア精神に溢れた歯科医師を養成できるような臨床教育にすべく、各科の先生方と協力しながら取組み、世間の皆様にも、「さすが北大歯学部の教育を受けた卒業生だね」と言われるような学生を、あるいはまた「さすが北大病院の研修を修了した研修医だわ」と言って頂けるような研修医を育てていければと思います。どうぞよろしくお願いたします。



北海道大学大学院歯学研究科
口腔健康科学講座・高齢者歯科学教室
山 崎 裕

【略 歴】

1985年3月 北海道大学歯学部卒業（13期）
1989年4月～9月 田附興風会北野病院麻酔科研修
1992年7月 日本口腔外科学会認定医（現：専門医）
1993年8月 北海道大学歯学部附属病院助手
1996年9月 歯学博士取得
1998年10月 日本口腔外科学会指導医
2006年6月 北海道大学病院口腔内科講師
2013年8月 北海道大学大学院歯学研究科高齢者歯科学教授

【就任にあたり】

2013年8月1日付けで高齢者歯科学教室の教授に就任いたしました。

高齢者歯科学はまだ歴史が浅い学問で、現在、全国の大学歯学部が高齢者歯科を有する大学は半分もありません。近年、わが国は世界一の速さで超高齢社会に突入し、高齢者歯科に対する社会的ニーズは今まで以上に大きなものになっています。その主なものは、全身疾患を有する高齢者に対して安心して安全な歯科治療を提供すること、高齢者に新たに増加している病気に対する適切な対応、在宅・施設での歯科診療を医師、看護師など他の職種と連絡をとり協力して行うことなどがあげられます。

高齢者にとって大切なことは「食べること」であります。きちんと食べれるようになるためには、義歯や差し歯などの治療により咬めるようにすることの他に、食形態や食具の工夫を通

して食べる環境の整備、食べる機能の回復、増進のための摂食・嚥下リハビリテーション、口腔乾燥や味覚障害、口内炎の治療などを通して口内の環境の整備、栄養指導などさまざまなことが関連してきます。これらを総合的に支援する科が、高齢者歯科ですので、我々の責務は重大です。

私は北大を卒業後、口腔外科学第一講座（現在の口腔診断内科学講座）に残り、昨年までの28年間の前半2/3は口腔外科、後半1/3は口腔内科の臨床・研究を行ってきました。この度、高齢者歯科学という新たな分野に携わることになり、今までの経験を生かし、社会のニーズに応えられるような優秀な人材を輩出し、北大独自の個性あふれる教室づくりを目指したいと思っております。皆様、今まで以上のご指導、ご鞭撻のほど、何卒、宜しくお願いいたします。



北海道大学大学院歯学研究科
口腔健康科学講座・生体材料工学教室教授

吉田靖弘

【略歴】

- 1990年3月 広島大学歯学部卒業
- 1990年7月 広島大学歯学部附属病院 医員（歯科・研修医）
- 1991年4月 広島大学歯学部附属病院歯科補綴科 医員
- 1992年4月 どえ歯科医院勤務
- 1993年4月 広島大学歯学部 研究生
- 1995年10月 広島大学歯学部歯科理工学講座 助手
- 1996年6月 博士（歯学）
- 1996年12月 ルーベン・カソリック大学（ベルギー王国）留学
（1996年12月～1997年11月、1998年3月～1998年9月）
- 2002年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科生体材料学分野 助教授
- 2007年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科生体材料学分野 准教授
- 2014年2月 北海道大学大学院歯学研究科生体材料工学教室 教授
- 2014年6月 William J. Gies Award (IADR/AADR) 受賞 他15件受賞

【就任にあたり】

平成26年2月1日付をもちまして、歯学研究科・口腔健康科学講座・生体材料工学教室教授を拝命しました。もともと私の実家は代々、三重県で歯科医院を開業しており、父親で三代目でした。私も父の後を継ぐべく、広島大学歯学部卒業後は義歯や人工歯根を専門とする歯科補綴学を専攻しましたが、学位（博士号）取得に向けて歯科材料の研究指導を受けておりました歯科理工学講座で助手の席をいただくことができ、ベルギーのルーベン・カソリック大学留学、岡山大学助教授・准教授を経て、今日に至っております。現在、私が担当しております「生体材料工学」は、歯科で扱う材料全般の教育・研究を行う学問分野です。歯科臨床に密接な関連があり、基礎と臨床の境界に位置する融合領域として発展してきました。その学問的背景に基づき、臨床を意識した教育や研究を実践するよう心掛けています。まず歯学部教育では、自らの臨床経験を活かして、「歯科臨床」と「歯科

材料」の関連性を常に学生に意識させながら科学的な発想を身につけさせるとともに、臨床でぶつかる様々な問題を解決する能力を養うよう取り組んでいます。

一方、大学院においては、研究者の養成と高度な専門的職業能力を有する人材の養成が求められています。特に、歯科材料・生体材料は臨床応用されることにその存在意義があることを考えますと、大学院教育では臨床展開を視野に入れた研究マインドを養うことが不可欠です。故に、大学院生には臨床に接する機会を可能な限り設けるよう促し、「歯科臨床の中での材料」を理解させるよう心掛けています。「臨床の問題」から材料学の新たなテーマを見出し、「臨床に役立つ材料開発」へとつなげていくことこそ生体材料工学の本道です。この「材料の臨床応用」は、医学に先だって歯学が実践してきたことであり、現在、我が国の成長戦略として掲げられている医療産業の創出にもつながります。

また近年、材料に対する生体の反応が以前にも増して重要視される中、従来の学問領域の枠を越え、生物学的基礎や歯科臨床との連携を通して学際的研究を推進し、新たな研究領域の開拓につなげていくことも必要です。この考えの下、生体と材料の界面をナノレベルで解析するという基礎研究を皮切りに、抗菌物質を歯面に留める口腔ケア製品、接着性を有した骨置換型人工骨、薬剤を融合した医用材料、薬剤の徐放を精密制御できるドラッグデリバリーシステム

など、これまでになかった高機能材料の開発へと展開してまいりました。これらのプロジェクトは科学技術振興機構（文部科学省）、厚生労働省、経済産業省など国の様々な助成を受けて開発を進めており、一部は近い将来の実用化を見通せる段階にあります。今後も歯学の枠を越えて医学や工学など様々な分野との共同研究を通して、幅広く研究開発を推進していきたいと考えております。よろしくご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。



北海道大学大学院歯学研究科
口腔健康科学講座・口腔分子生化学教室准教授

藤 沢 隆 一

【石灰化のしくみを探って】

本年4月をもちまして、口腔分子生化学教室の准教授に就任しました。私を支えてくださいました、本学部の皆様に感謝いたします。私が、札幌に来てから、四半世紀を越えるほどになりました。久保木前教授のお招きにより、幸運にも、北海道大学の一員となることができました。この時が、私にとって初めての北海道旅行で、冬の千歳空港に降り立ったとき、北海道の寒さを初めて経験しました。

最初に来たときには、こんなに長い期間を札幌で過ごすことになるとは、思っていませんでした。しかし、しだいに、札幌の居心地の良さが、わかるようになってきました。まず言えることは、札幌市が、生活を送る上で、適度な大きさであるということです。札幌の大きさ・人口は、東京圏のように巨大すぎず、パリ、ロンドンに近いと言ってよいでしょう。札幌のもうひとつの魅力は、文化的な都市であるということです。北海道近代美術館、芸術の森美術館、そしてキタラ・コンサートホールは、札幌の誇るべき施設です。私たち夫婦は、札幌周辺で美しい風景のスケッチを楽しみ、そして、毎年のPMF教育音楽祭を楽しみにしています。

助手就任後に、アメリカ留学をさせてもらったことにも、感謝しています。私が行ったのは、テキサス大学歯学部生化学教室のW.T. バトラー先生の研究室です。先生は、骨や歯の基質タンパク質研究の第一人者です。先生は、競争社会アメリカの科学者にしては珍しく、温厚な

性格で、敬虔なクリスチャンでありました。その先生の訃報を、この2月に聞くことになるとは、思ってもいませんでした。先生の、日本のこの分野に対する貢献に感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたいと思います。

さて、私の研究テーマは、骨、歯の基質タンパク質と、それらによる石灰化機構です。生物であるわれわれの体内に、無生物であるミネラル結晶が形成されるというのは、考えてみれば、不思議なことです。この機構の謎に、私の興味は引き付けられました。生化学者としては、石灰化の場に存在する基質タンパク質が関与しているのではないかということが、当然、考えられます。

骨や象牙質には、特徴的な、カルシウム結合タンパク質群が含まれます。たとえば、象牙質には、象牙質リンタンパク質と呼ばれるタンパク質が存在し、石灰化の核生成を起こすことが知られています。これらのタンパク質と結晶との相互作用は、従来の生化学で扱ってきたものと、本質的に異なるのではないのでしょうか。この研究のためには、新しいパラダイムが必要となるでしょう。

教育に関しては、学生は生化学に対して、ある種のながて意識を持っていることを、日々感じています。他の科目に比べて、生化学は抽象的であり、イメージがつかみにくい難点があります。視覚的表現を多用して、この点を克服していきたいと思います。



北海道大学大学院歯学研究科
口腔健康科学講座・高齢者歯科学教室准教授
小林 國彦

【略 歴】

昭和56年3月 北海道大学歯学部卒業
昭和56年4月 北海道大学歯学部歯科補綴学第二講座助手
昭和61年11月 北海道大学歯学部附属病院第二補綴科講師
平成2年3月 歯学博士
平成14年4月 北海道大学病院歯科診療センター・高次口腔医療センター
高齢者・障害者部門講師
平成25年12月 北海道大学大学院歯学研究科高齢者歯科学教室准教授
日本老年歯科医学会：専門医、指導医 日本補綴歯科学会：専門医、指導医

【就任にあたり】

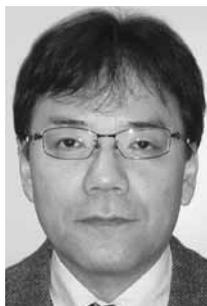
平成25年12月16日付けをもちまして、歯学研究科 口腔健康科学講座 高齢者歯科学教室准教授に昇任いたしました。私は平成13年4月から講師として高齢者歯科学に関する教育、研究、臨床を行ってきました。我が国における65歳以上の方が全人口に占める割合は2012年で23.3%に達し、世界一高齢化の進んだ国となっております。当然の結果として、歯科を受診される患者さんにも高齢者の割合が増えており、その中には高血圧や糖尿病のような、慢性疾患を複数もっておられる方や、要介護状態で歯科医院に通院できない方も多くいらっしゃいます。有病高齢者の歯科医療は患者の全身状態の把握が重要で、全身管理の知識を有するだけでなく、医師との連携である医歯連携、介護職などとの他職種連携などを行うことも重要となってきま

す。そういった能力をもった歯科医師を養成することが我々の使命であり、講義、実習、臨床研修を通してその教育に励んでおります。

臨床面では、訪問診療をされている開業医の先生などからの要請で、全身状態などの問題で、往診では歯科診療ができないような患者さんを大学で、全身管理下で集中治療を行うことや、成人障害者の患者さんの入れ歯やブリッジなどの治療、全身麻酔下での歯科治療などを行ってきました。

研究面ではできるだけ歯にダメージを与えない治療法について長年研究を行ってきております。

高齢者歯科学は今後ますますニーズが増えていくものと考えられます。それに応えられるよう、今後も活動していきたいと考えております。



北海道大学大学院歯学研究科
口腔病態学講座・口腔顎顔面外科学教室准教授

林 利彦

【略 歴】

1989年3月 北海道大学歯学部 卒業（17期）
 1990年4月 北海道大学医学部 入学
 1996年3月 北海道大学医学部 卒業（72期）
 2002年4月 北海道大学大学院（医学研究科） 入学
 2006年3月 北海道大学大学院 博士課程修了
 2006年7月 福井大学医学部皮膚科形成外科診療班 助教
 2007年12月 市立札幌病院 形成外科
 2008年7月 北海道大学病院 医員
 2009年4月 北海道大学病院 助教
 2013年9月 北海道大学歯学研究科口腔顎顔面外科 准教授
 北海道大学病院形成外科 客員臨床准教授

【就任にあたり】

平成25年9月1日付けをもちまして、歯学研究科 口腔顎顔面外科 准教授の任を拝することになりました。私が北海道大学で最初にお世話になった歯学部へ少しでも恩返しができる機会がもてたことを心から感謝しております。私は歯科医師免許取得後、北海道大学医学部に再入学して卒業後18年間、形成外科医として北海道大学形成外科医局に属しながら大学病院をはじめ地域医療を担う中核病院で研鑽を積んできました。その経験が期待されての今回の任命と考えています。

歯学研究科において私が任された担当は、臨床関連医学の主に歯科学生への教育です。現在、医学分野においては各診療科の専門化・高度化がすすんでいます。一方、患者さんの高齢化がすすみ、いろいろな合併症を抱えて来院される患者さんも増加しています。そして患者さん一人一人が医療安全を含む診療の質にいっそう敏感になり、より安全で高度な医療を期待する時代となりました。

このような現状から患者さんへ歯科治療を行うに際して、歯科の専門知識をはじめとして内科、外科、救急医学など多くの一般臨床科医としての知識が必要となります。故に歯科学生も多くの臨床関連医学の知識の習得が必須となります。この習得の流れの効率化をいっそう計りたいと考えています。

特に先進医療を実践する大学病院では医師、歯科医師以外にも薬剤師、看護師、放射線技師、臨床工学士などあらゆる職種の専門家が働いています。このような人々と効率の良い連携がとれてこそ質の高い安全な医療提供が可能になると思います。そのためには知識だけではなく幅広い視野が求められます。また視野を広げるためには多くの経験が必要です。故に学生時代に歯科学生に経験を積ませるため将来的に歯科学生にも医学生と同様な救急医学をはじめとする院内実習を選択的に可能になるように考えています。今後とも何卒宜しく願いいたします。

受賞

学会賞受賞

受賞者：佐藤 淳¹、阿部貴洋¹、浅香卓哉¹、秦 浩信¹、山崎 裕¹、進藤正信²、北川善政¹
 (¹口腔診断内科学教室、²口腔病理病態学教室)

受賞名：優秀ポスター賞

受賞演題名：FMISO-PETは口腔扁平上皮癌の低酸素状態のみならず細胞増殖能を反映する

学会名：第58回 日本口腔外科学会総会・学術大会
 (2013年10月11日～13日、広島)



【目的・結論】低酸素状態は固形癌の重要な予後因子のひとつであり、放射線・化学療法に抵抗する。¹⁸F-Fluoromisonidazole (FMISO)-PETは癌の低酸素状態を非侵襲的に検出できる。著者らは口腔扁平上皮癌 (OSCC) 患者のFMISO-PETの集積が低酸素誘導因子 (HIF-1 α) の発現に関連することをすでに報

告した。Ki-67抗原は細胞増殖マーカーとして癌の生物学的悪性度の指標として知られている。本研究の目的はOSCC患者のFMISO-PET所見とOSCC組織内のKi-67の発現の関連を明らかにすることであり、FMISO-PETがOSCCの低酸素状態のみならず細胞増殖能を反映する可能性を初めて示した。

受賞者：齋藤恵美子 (歯周・歯内療法学教室)

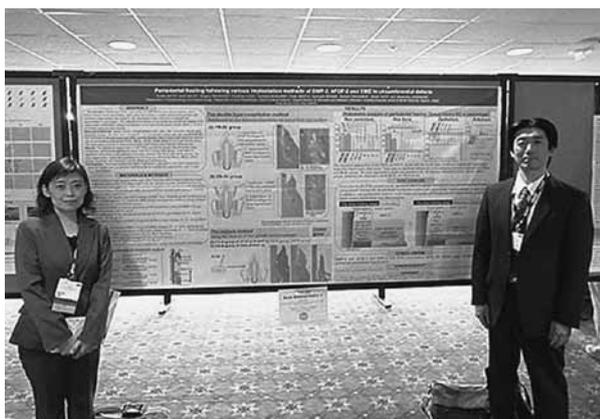
受賞名：The Research Forum Basic Science Award

受賞演題名：Periodontal healing following various implantation methods of BMP-2, bFGF-2 and EMD in circumferential defects

学会名：The 99th Annual Meeting of American Academy of Periodontology (AAP)
 (2013.9.28～10.1, Philadelphia, USA)

アメリカ歯周病学会 (AAP) は、歯周病学分野で最も長い歴史を持ち、official journalとしてJournal of periodontology (JP) を発行し

ているおそらく歯周病に関する学会の中では世界で最も権威のある学会です。私は、大学院生の学位論文をこのJPに掲載させていただき、



その研究をさらに発展させて本学術大会で発表しました。現在行なわれている歯周組織再生療法では効果が期待出来ない難しい症例である水平性骨欠損に対して、新しい移植法（double layer constitution method）を考案して、成長因子であるBMP-2、FGF-2、EMDのなかからそれぞれ2種類ずつ組み合わせて、比較いたしました。歯周組織再生を狙うためには、歯周組織それぞれの再生を行う空間を確保すること、さらに用いる成長因子の作用を治癒期間に合わせてコントロールすることが重要であることを訴えました。この研究は、Research Forum Poster Sessionsに提出された全演題の中から、予備審査にてBasic Research部門の8名のファイナリストに選考していただき、本学会のコンペティションでプレゼンテーションおよび質疑

応答による審査の結果1位となり、the Research Forum Basic Science awardを受賞することができました。さらに、多くの諸外国の先生方に本研究内容を高く評価していただき、とても感謝しております。その後、AAPのMember MagazinesであるPeriospectives Oct-Dec 2013に、受賞者インタビュー記事も掲載していただきました。

最後に、多くのご指導を承りました、加藤熙北大名誉教授、川浪雅光教授、高橋茂准教授、齋藤彰助教、また、研究を進めるにあたりまして、ご協力いただきました、弓削文彦博士、大学院生の中島利徳氏、上北弘樹氏、学術支援部の本間義幸氏、高橋智美氏に深く感謝を申し上げます。

受賞者：長谷川智香（硬組織発生生物学教室）

受賞名：ANZBMS 2013 Travel Award

受賞演題名：Disrupted signaling of FGF23/klotho induces not only vascular calcification but also vascular ossification.

学会名：23rd ANZBMS annual scientific meeting, with JSBMR
(2013.9.8 ~ 11, Melbourne, Australia, 2013.9.8-11)

昨年開催された国際骨代謝学会（IBMS）・日本骨代謝学会（JSBMR）第2回合同国際会議（第31回日本骨代謝学会）よりANZBMS 2013 Travel Awardを戴きました。本学会では、異所性石灰化の病理機序解明を目的とした研究成果について報告を行いました。

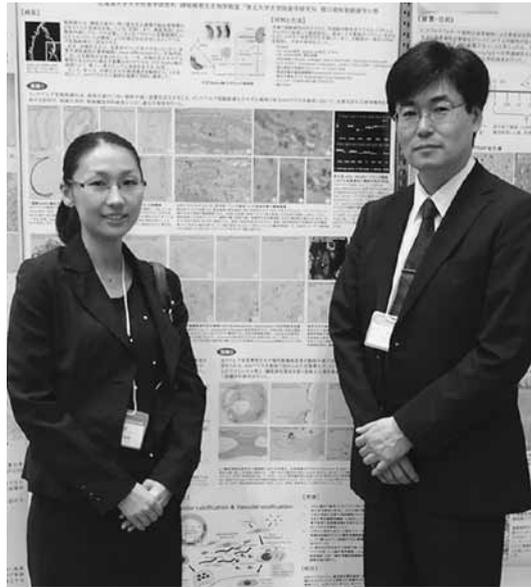
異所性石灰化とは、骨や歯などの硬組織以外

の軟組織で石灰化が生じる現象であり、慢性腎臓病等に起因した全身のミネラル代謝異常により生じる血管中膜の石灰化などが挙げられます。このような異所性の血管石灰化は、骨基質石灰化同様、生物学的な機序により進行する可能性が示唆されていますが、その詳細は未だ明らかとなっていません。

我々が血管石灰化のモデル動物であるklotho遺伝子変異マウスを用いて検索を行った結果、骨基質石灰化と似たような機序で生物学的に血管石灰化が生じること、また一部で、骨芽細胞・破骨細胞・骨細胞様の細胞が出現し、リン酸カルシウム結晶からなる基質を形成する血管骨化が生じている可能性が推測されました。「血管

に骨ができる」という驚くべき結果が得られた一方、今回の検索で解明できなかった点も数多くあり、今後さらなる検索を進めていきたいと思っております。

最後になりますが、この場をお借りして、日々熱意を持って御指導くださる網塚教授ならびに研究室の諸先生方に深く感謝申し上げます。



受賞者：長谷川智香（硬組織発生生物学教室）

受賞名：北海道大学大塚賞（2014年3月11日）

受賞演題名：Morphological assessment of bone mineralization in tibial metaphyses of ascorbic acid-deficient ODS rats. (アスコルビン酸合成能欠如 (ODS) ラットの骨組織石灰化における組織学的解析)



北海道大学大塚賞は、本学名誉教授の大塚榮子先生に因み、男女参画事業の一環として、研究者を目指す女子学生育成のために設立されたものです。今回、このような榮譽ある賞をいただき、大変光榮に思っております。

大学院の4年間で、学位論文としたアスコルビン酸合成能欠如ラット（正常なコラーゲン線維を合成できない）の骨組織石灰化の研究を始め、血管の異所性石灰化や石灰化に關与する酵素の一つであるアルカリフォスファターゼが過剰発現したマウスの骨組織石灰化の研究など、一貫して「基質石灰化」をテーマに仕事をしてきました。骨基質石灰化は、骨芽細胞や肥大化軟骨細胞が、基質小胞やコラーゲン線維、非コラーゲン性タンパクを分泌するとともに、局所的にリン・カルシウムイオンの濃度が上昇することにより基質小胞を起点として開始する基質小胞性石灰化と、それに続くコラーゲン性石灰化によって進行します。これらは大変複雑なプ

ロセスからなり、未だ詳細が明らかとなっていない点が多々存在します。石灰化の研究は、これまで齒科の諸先生方が牽引されてきた重要な領域であり、また、私にとって、未知なることがたくさん詰まった大変興味深いものです。異所性石灰化も含めた生体内で生じる基質石灰化について、様々な角度からアプローチすることで、その全貌をすこしでも明らかにしてゆきたいと思っております。

4年間の成果についてこのように御評価いただいたことを大変うれしく思うと同時に、ここまで熱心に御指導くださった網塚教授始め硬組織発生生物学教室の皆様にご心より感謝致したいと思います。また、重ねて、研修医時代を過ごし、大学院で所属が変わった後も外来での診療を含め、暖かくサポートしてくださった大畑名誉教授始めリハビリ補綴学教室の皆様にごお借りして御礼申し上げます。

受賞者：本郷裕美（硬組織発生生物学教室）

受賞名：優秀ポスター賞

受賞演題名：副甲状腺ホルモン投与による骨細胞周囲の骨基質改変について

学会名：第55回歯科基礎医学会学術大会・総会（2013年9月20～22日、岡山）

受賞者：Hiromi Hongo

受賞名：IBMS Herbert Fleisch Workshop Travel Award

受賞演題名：Alterations of bone matrix surrounding osteocytes and their lacunae induced by administration of PTH

学会名：2014 IBMS Herbert Fleisch Workshop（日本骨代謝学会より授与）

この度私は、2013年9月20-22日行われた第55回歯科基礎医学会学術大会・総会にて組織・発生学部門にて優秀ポスター発表賞を、2013年12月に日本骨代謝学会よりIBMS Herbert Fleisch Workshop Travel Awardを頂き、2014年3月16-18日に2014 IBMS Herbert Fleisch Workshopに参加させて頂きました。

私は副甲状腺ホルモン投与によって誘導される骨細胞性骨溶解の機序を明らかにすることを目的として研究を行っています。マウスの外頸静脈にhuman PTH (1-34; 80 μg/kg)を投与し、数時間後における血中カルシウム濃度測定、原

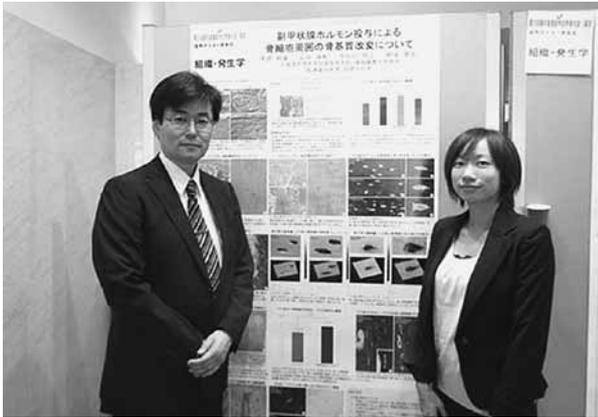
子間力顕微鏡によるナノインデンテーション、透過型電子顕微鏡およびvon Kossa染色による観察にて検索しました。また破骨細胞が存在しないRANKL-/-マウスに対しても同様の実験を行い、さらにカルセインを投与し蛍光顕微鏡観察しました。

PTH投与後6時間の皮質骨で一部の骨小腔が僅かな形状変化を示し、その周囲は著しい弾性率の低下を示しました。9時間後には骨小腔は拡大し、内部にはコラーゲン線維が分解されたと思われる綿毛状の不定形構造物や断片的な石灰化物が観察され、骨小腔集にはvon Kossa

陰性の未石灰化骨基質が認められました。RANKL-/-マウスでも同様の結果が得られ、さらに骨小腔周囲にはカルセイン標識を観察したことから、骨細胞はPTHに反応して骨小腔周囲の骨基質を融解あるいは石灰化沈着を行う

と考えられました。

このような素晴らしい賞を頂くことができたのは、指導して下さる網塚教授をはじめ、研究室の先生方のおかげだと思っております。ありがとうございました。



医学教育賞

受賞者：本間義幸（大学院歯学研究科・学術支援部・技術専門員）

受賞名：医学教育等関係業務功労者



このたび、思いもかけず平成25年度文部科学省の医学教育等関係業務功労者表彰を受け、身に余る光栄と思っております。

私は、1976年に免疫科学研究所附属免疫動物実験施設（現、遺伝子病制御研究所附属動物実験施設）に用務補助員として採用され、その後歯学部口腔解剖学第二講座（現、口腔健康科学講座硬組織発生生物学教室）、歯学研究科学術支援部と異動し、以来30年以上光学顕微鏡観察用組織標本の作製を通して、研究や教育の支援に微力を尽くしてまいりました。

何の資格も持たない私が技術を習得するうえで多くの方々にご迷惑をかけたことは言うまで

もありませんが、沢山の失敗を通して技能を身に付け、今日まで何とか業務を遂行して来ました。これも偏に今までご指導いただいた諸先生、諸先輩、同僚の皆様をはじめ、お世話になりました事務職員の方々のお蔭によるもので、心からお礼を申し上げる次第です。

最後に、私は今年度で定年となりますが、今後は嘱託職員としてもう少しこの美しい職場にお世話になるつもりでおります。今回の受章を励みに一層精進していきたいと思っております。皆様にはこれまでと同様にご支援、ご協力を賜りますようお願い致します。

行事紹介

平成25年度CBTを終えて

昨年6月12日に大きなトラブルもなくCBTを終了し、現在は6月11日の試験にむけた準備が進行しているものと思います。昨年のCBTを終了後、一人のモニター委員からPCのOSがXPでは対応できなくなるという指摘があり、教授会で報告したところ、鈴木研究科長・歯学部長裁量経費により昨年末にOSがwindows 7のPCを購入していただきました。平成22年に井上農夫男先生から実施委員長を引きつぎ、4年間務めさせていただきましたが、平成26年度から鄭漢忠教授に実施委員長を引き継ぎました。井上農夫男先生が実施委員長だった平成19年から21年までの3年間は副実施委員長を務めさせていただきました。この3年間は歯学部A棟の6階の教室（現第5講義室）で2日間に分けてCBTを実施しておりました。クーラーもなく非常に暑い上に、2日間に分けてCBTを実施するということでモニター委員からいろいろな重大なクレームが出て、井上実施委員長が非常に苦勞されていたことが思い出されます。私が実施委員長を引き継いだ平成22年度は幸運にも、試験場を医歯学総合研究棟4階情報処理室に移し、学生全員が同時に一日で受験するシス

テムに変更できました。その結果、ここ4年間はモニター委員からの重大なクレームもなくなり、順調にCBTを実施できております。

最後に、副実施委員長を務めた3年間を加えた7年間CBT実施に協力して下さいましたCBT実施部会の飯塚正サイトマネージャーならびに各委員、学術支援部ならびに各教室の皆様様に心から感謝申し上げます。

（文責 CBT実施部会委員長 柴田健一郎）



CBTの実施風景

平成25年度共用試験OSCE（オスキー）

歯学部では、平成25年7月6日（土）に共用試験OSCEを実施し、歯学部5年生48名が受験しました。昨年10月に歯科診療センターは外来新棟に移転したため旧歯科診療センターと歯学部を使用したOSCEはこれが最終となりました。OSCEは、Objective Structured Clinical Examinationの頭文字をとったもので、臨床現場における学生の技能と態度に関する試験です。北海道大学病院での臨床実習を開始する前の学生（5年生）の臨床技能と態度を測るもので、知識を測るCBT（Computer-Based Testing）と合せて共用試験として、全国に29ある全ての大学歯学部および歯科大学で毎年実施されてい

ます。

今年も試験前日は準備および最終確認のため、歯科診療センター診療終了時間を一部の診療科で1時間早めさせていただきました。通院の皆様にはご理解をいただきありがとうございました。前日の数時間かけての準備と当日の運営に、延べ約120名の教員、職員および大学院生が関わり、他大学の教員が8名（モニタリング委員、外部評価者）とともに、前日のテストランも含め、OSCEは円滑に最後まで行われました。無事終了して、実施委員会としても安堵の気持ちでいっぱいでした。

実際の試験の面接系では模擬患者さんにご協

力いただき医療面接やブラッシング指導などを行ったりします。技能系ではファントムを使って支台歯形成や充填などの実習があります。試験中は余裕の学生もいましたが、臨床にかかわる臨床技能および態度の試験のためか、動きがぎこちなかったり、声がかすれたり、手が震えたりなど、学生にとっては、これまでに経験のない緊張の連続だったようです。彼らを見守る我々も、課題をきちんと達成できるか期待と不安を持って、自分の役割を行っていました。結果は全員合格となりました。学生はもちろんのこと、教育を担当している我々も安堵しています。現在、彼らは外来新棟の歯科診療センターおよび病棟で臨床実習を行い各自の知識、技能、態度のさらなる向上に励んでいるところです。病院内で彼らに会うこともあるで

しょう。その時は、温かい目で見守ってください。よろしく願いいたします。

(文責 OSCE実行委員長 北川 善政)



OSCEの受験者（中央）と評価者（左右）

夏の終わりのFDワークショップ

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部では、毎年夏の終わりにFDワークショップを行っています。大学におけるFD (Faculty Development) が義務化される前から継続しており、今回で14回目になります。今回のテーマは、「コーチング-コミュニケーションの引き出しを増やそう-」で、平成25年8月29日(木)、30日(金)の一泊二日、北広島市の北広島クラッセホテルで開催されました。

このFDワークショップは、FD委員会が中心となり、その時点で歯学研究科・歯学部が対処していく必要がある事象を要点とし、「現状の把握」、「問題点の抽出」、「方略」、「具体案の作成」(「評価」まで行う場合あり)という流れで、教員がグループ活動を中心としてその事象への対応案を作り上げるものです。作り上げられた対応案のいくつかは、これまでに実現・実行し、歯学研究科・歯学部プラスに働いています。

今回は、この毎年の流れを脇に置き、教員各自のスキルアップを意図した「コーチング」をテーマとし、日本歯科大学附属病院 総合診療科 教授 仲谷 寛 先生と講師 大澤銀子先生を講師にお招きしました。お二人の先生は、「コーチング」の第一人者です。また、タスク

フォースとして、この「コーチング」のセミナーに参加経験のある開業医の平 博彦先生が、同じく参加経験のある当研究科の佐藤嘉晃先生とともに、ワークショップのフォローをしていただきました。参加者は歯学研究科・歯学部から31名であり、北海道大学高等教育推進機構の竹山幸作先生も参加していただきました。

ワークショップは、レクチャー、体験を主とした実習、発表を繰り返すことにより、自分のスタイルを知ること、会話の中のポイント、コーチングとは、コーチングの実際など、お二人の先生の説明、指導のもと、参加者は積極的に実習に参加し、発表をし、体験を通じた気付きや学びをそれぞれ手に入れていました。私たち教員は、「教」がついていますが教育のプロではありません。日頃、学生や教室(医局)員への教育、指導に悩みながらも一生懸命に取り組んでいる現状で、今回のFDワークショップ「コーチング」は、参加者にとって、ワンランク上のスキルアップにつながったと感じます。そして、今後の学生や教室(医局)員の教育へ、今回得た「もの」が活用されることでしょうか。一日目の夜に催された懇親会は、講師の先生を交えた、各教室(医局)の壁を取っ払った縦横無尽な情

報交換の場となりました。ここで得た“もの”も、歯学研究科・歯学部という組織の中で活かされることと思います。

本年度も第15回FDワークショップの準備を始めています。多くの教員の方々が参加し、歯学研究科・歯学部がさらに前進するよう、FD委員会は努力していきます。

最後になりますが、我々の想いをご理解くださり、北海道まで来ていただいた講師の仲谷先

生、大澤先生に、また、北海道医療大学歯学部勤務を経て、少し前にご開業され、ご自分の歯科医院での治療のある中で、このワークショップにご参加いただいた平先生に、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(文責：FD委員会委員長 八若 保孝)



歯学研究科で防火訓練を実施

歯学研究科では11月13日(水)に防災訓練を実施しました。

今回の訓練は、歯学部C棟改修工事に伴う防火・防災計画に則り、工事エリア内で発生した

火災に対し、工事業者と歯学研究科との連絡体制の確認と円滑な避難誘導の確認を目的に実施されました。

当日は、C棟3階エレベーターホール付近か



消火作業



研究科長からの講評

ら出火したとの想定で、自衛消防隊長である鈴木邦明歯学研究科長の指揮により、通報連絡係、避難誘導係、消火係、救護係、防護措置係の各担当に分かれ、現場の確認、消防署への通報、非常放送、避難者誘導、消火活動等の訓練を実施し、学生・職員（大学病院職員を含む）及び

工事業者等約50名が参加しました。

訓練終了後、鈴木研究科長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時にはこの訓練を思い出して行動して欲しい。」との講評がありました。

（大学院歯学研究科）

歯学研究科で市民公開特別講座 「自分じゃ気づかない、寝ている間のいびきと歯ぎしり」を開催

歯学研究科では、9月29日（日）8時30分から12時過ぎまで歯学部講堂において、市民公開特別講座「自分じゃ気づかない、寝ている間のいびきと歯ぎしり」を開催し、自分では気づかない睡眠中のいびきや歯ぎしりから起こりうる問題とスクリーニング方法、治療法について、市民の方から専門家までと一緒に、公開講座で勉強することを目的としての講演を開催しました。

歯学研究科 北川善政教授が司会を務め、デンマークオーフス大学Peter Svensson教授から「ブラキシズムについて」の講演があり、歯学研究科有馬太郎助教から「睡眠時無呼吸症候群について」、北海道大学病院高次口腔医療セン

ターの山口泰彦准教授から「睡眠時無呼吸症候群の臨床について」の講演がありました。

この講演では専門家による英語－日本語の同時通訳が行われ、歯科医師等の専門家のみならず、一般市民の方にも理解できるように説明が行われました。

各講演終了後と全体の講演終了後には質疑応答の時間を設け、受講者からの様々な質問に対して各講師から回答がなされました。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジや国立大学フェスタに参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。



Svensson教授による講義



受講風景

歯学研究科で「動物供養祭」を挙行

歯学研究科では、11月28日（木）午後4時30分から、学部会議室において、動物供養祭を執り行いました。供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（ラット、マウス計1,810体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約30人が参列しました。

供養祭では、最初に鈴木邦明歯学研究科長か

ら挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の柴田健一郎教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文（さいもん）」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（大学院歯学研究科）



参列者に挨拶する鈴木研究科長



「祭文」を読み上げる柴田委員長



献花する参列者

2014年度新入生合宿

北海道大学歯学部学友会学生委員長

歯学部5年 山崎七愛

今年度より、新入生合宿の企画運営の多くを学友会が任されることになり、昨年度に比べると、全く違うものに仕上がりました。昨年度から、合宿場所もルスツリゾートに変わり、雰囲気は全く違うものになったと感じます。バス中の司会進行や寮歌指導からはじまり、新入生との交流会や学友会企画など、学生が中心とな

り作り上げました。初めての試みということで、どのようになるか、一年生の反応はどうか、不安がいっぱいでしたが、一年生の声を聞くと楽しかったという言葉が多くありました。新入生合宿を終えて、この合宿に参加した上級生、そして新入生にその感想をいただきました。



「新入生合宿を終えて」

北海道大学歯学部学友会学生委員長

歯学部4年 森本 友梨恵

2014年4月12日から一泊二日で行われた新入生合宿に参加して驚愕したことは、新入生のコミュニケーション能力の高さです。3年前の私は先輩に話しかけられてもただただ怯えて質問に答えるので精いっぱいだったのですが、答えだけでなく関連事項を述べ、場を盛り上げるといったテクニックを持ち合わせている新入生がたくさんいました。大勢の前に立ちマイクを使って自己紹介をする場面でも、そつなく無難に終わらせようとするのではなく、いかにして自分のことを覚えてもらおうかと創意工夫を凝らし自己アピールをしている人がいて、感心というよりも尊敬の念をおぼえました。

また、この合宿の企画・運営をされていた学友会の方々や部活の勧誘で参加していた上級生の方々の行動力ややる気にも感服しました。新

入生のために事前に話し合い計画を立て実行する、当たり前の流れですがそれぞれの過程を確実にこなさないと良い結果は得られないものです。

今回の合宿で学友会が中心になって行った企画は生活面や学習面でのアドバイスや、歯学部にもつわるウルトラクイズ、飲酒に関するグループワークなどがありましたが、本当にどれもスムーズに進行していました。

個人的には寮歌指導を担当し、たくさん緊張して失敗もしました。ただ、この失敗で前より打たれ強くなり、反省を生かして頑張っていけそうな気が起きました。感想と言いつつ、私の鬱々とした恨みがましい反省文になってしまったことをお詫びいたします。



←帰りのバスにて、夜更かしの結果



新入生合宿「グループワーク」

北海道大学歯学部学友会学生委員長

歯学部1年 伊東和樹

今回のグループワークは未成年の僕にとってとても新鮮でためになるものでした。僕の班では、最終的に思いやりが大事だという結論になりました。

僕の班では僕が司会をやったのですが、みんな意見をたくさん出してくれて、とても進めやすい雰囲気でした。模造紙を作って提出するときに先輩ともたくさんしゃべれたのでいいなと思いました。

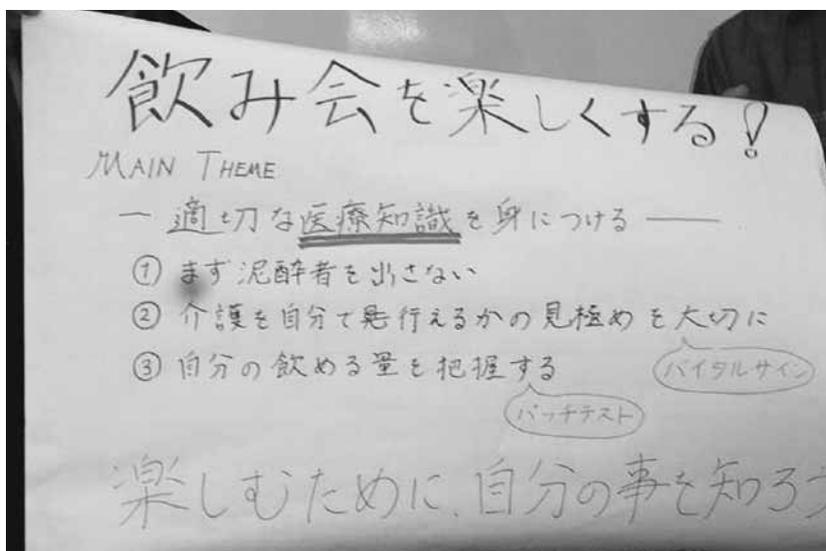
模造紙で発表する形は見てて飽きなかったのでもいい方法だと思います。全体の雰囲気は先輩

も後輩もみんなで話し合っただけで模造紙を作っているところがよかったです。

グループワークは飲酒についてのことも学べたし、どう対処すればいいかも考えることができました。なによりも、話したいと思っていた先輩や友達と話せたことが一番よかったです。

飲酒についてのスライドショーは分かりやすく、見やすかったのも、これからの大学生活に活かされると思いました。

来年は先輩として、グループワークでたくさんの後輩と喋れたらいいなあと思っています。



歯学研究科・教室紹介

今回の広報誌から新しく「教室紹介」のコーナーが始まります。このコーナーでは歯学研究科内の教室を取り上げ、その教室ではどのような授業を担当し、どんな研究をしているのかについて紹介していきたいと思います。初回は口腔機能解剖学教室と予防歯科学教室です。

【口腔機能解剖学教室】

当教室は1967年6月に北海道大学歯学部が開設された翌年の4月に、解剖学・口腔解剖学の授業を担当する「口腔解剖学第一講座」として設置され、2000年4月の大学院重点化に伴い「口腔機能解剖学教室」と名称を変更しました。歴代の教授は中根文雄(1968～1991)、吉田重光(1991～2007)、土門卓文(2008～)です。以下、当教室の担当する授業と現在行っている研究について簡単にお話ししたいと思います。

教育では、歯学部2年前期に「歯の解剖学」、2年後期に「解剖学・口腔解剖学」の授業を担当しています。2年生になった学生は4月に歯学部へ学部移行後、将来歯科医師になるための基礎体力である「歯の解剖学」を最初に学びます。この授業では、プラスチックでできた模型歯を観察・スケッチして(写真参照)歯の形態や特徴を把握した後、ヒトの歯の形態を一歯ずつ詳細に観察して様々な個性を理解し、最終的

に歯の種類を的確に鑑別できることを目標としています。

歯学部2年後期の「解剖学・口腔解剖学」の授業では、最初に人体を構成する骨の形態を理解する骨学(写真参照)を学んだ後、故人の生前の尊いご遺志によって献体されたご遺体を解剖する人体解剖実習を行います。これは我が国では医・歯学部学生にのみ許された特別な実習です。この実習では、学生が自らの手でピンセットとメスを用いて人体を解剖し、自らが解剖した構造を自らの目で観察することによって、複雑な人体の三次元構造を理解することを目指しています。この実習は将来歯科医師になる歯学部生が対象ですので、特に頭頸部の構造については詳細に説明できることを目標としています。

研究では、口腔に関連する生理的・病理的諸現象を解明するため、主に動物実験や細胞培養を用いた研究を行っています。解析手段は、解



口腔機能解剖学教室の風景

剖学教室ですので、組織化学、免疫組織化学、走査型・透過型電子顕微鏡、コンピューター・グラフィックといった形態学的検索法を中心としていますが、分子メカニズム解析の際には、ウェスタンブロット法やRT-PCR法などの分子生物学的手法も併用しています。現在、当教室で行われている主な研究テーマは「破骨細胞・破歯細胞に関する研究」、「メダカ咽頭骨における硬組織間接着界面の研究」、「多生歯性の歯の

交換様式」、「成長期におけるソフトフード長期摂取が口腔領域に与える影響」などです。上記の研究への想いと研究内容の詳細については紙面では書ききれませんので割愛します。当教室の研究に興味のある方は直接教室までおいで下さい。研究への熱い想いをお話ししたいと思います。お待ちしております。

(文責・土門 卓文)

【予防歯科学教室】

1966年(昭和41年)、北大に歯学部が設置され、予防歯科学講座は1970年4月に開講しました。翌1971年1月には予防歯科外来診療が開始され、当時はむし歯の洪水状態だったにもかかわらず小児歯科学講座がまだ設置されていなかったこともあり、主に小児のむし歯予防を目的とした研究や診療を行っていました。以下に現在の状況について簡単に説明します。

教育では歯学部3年生前・後期の「衛生公衆衛生学」と「予防歯科学」を担当しています。衛生公衆衛生学は基礎でも臨床でもなく社会医学という分野に属している学問で、集団について学ぶのが特徴です。歯科医師は個々人の歯科治療に専念することが多いのですが、一方で集団を見る視点も必要です。学習の範囲はきわめて広く、健康やさまざまな疾患だけでなく環境保健や衛生行政などについても学びます。「予防歯科学」ではその名のとおりむし歯や歯周病などの歯科疾患の予防について学ぶわけですが、それまで基礎科目だけを学んできた3年生に対して臨床へと進む道案内の役割もあります。3年生後期に行っている「食の科学」では将来的に患者教育に活かすことができるように飲食にかかわる学生の知識を増やすことが目的です。5～6年生の臨床実習では歯科保健教育、う蝕と歯周病の予防にかかわる実習などを担当しています。6年生の夏休み前には班ごとに市内の保育園を訪れて園児にむし歯予防の話をし、集団健診の実際を体験してもらっています。この実習は診療所や病院の中ではわからない社会の一端を知る機会ともなります。

外来では小児から成人・高齢者までを対象

に、歯科保健指導、むし歯の予防処置、歯石除去やクリーニングなどの定期受診主体の診療を行っています。まったくむし歯や歯周病のない人もいますし、ご自分の歯があまり残っていない高齢の方も受診します。予防歯科の診療では、「現在以上に悪い状態にしない」のが目的ですから、若年者から高齢者までのすべての人が対象となります。数か月に1回程度の診療によって、受診者自らの健康維持・増進を専門的な立場から支援することを心がけています。また、北大病院に入院中あるいは退院して化学療法を行っている患者さんに対しての口腔ケアや口臭外来も担当しています。

このほか、社会的な活動としては、道内のいくつかの町村での歯科保健活動にかかわっています。また、無歯科医地区である天売島・焼尻島(羽幌町)に道が年3回派遣している歯科診療班には、その開始当初から積極的に参加しています。

研究面では、歯科保健に関係する疫学は長年のテーマです。日本の若年層ではむし歯の減少が続いていますし、年をとっても自分の歯を残せるようになってきました。しかし、まだ歯や口腔の健康については十分ではなく、いずれすべての人が一生自分の歯で食べられるようにしたいものです。次に臨床研究としては、集団健診の場で口腔乾燥症をスクリーニングするキットや唾液pHを測定する簡易型キット、唾液量の分泌を促進するペレット開発などの唾液関連の研究を、基礎研究としては、う蝕誘発菌と歯周病原菌の相互作用に関する研究を行っています。

歯科保健や歯科疾患の予防に興味のある方、
相談のある方はぜひ当教室にご連絡下さい。ご

来訪をお待ちしています。



えりも町での乳幼児歯科健診 (2014年5月)

『歯科医師から弁護士へ』



北大歯学部26期卒
小畑法律事務所
弁護士・歯科医師（歯学博士）

小 畑 真

obata@obatalaw.com

1 歯科医師という職業

私は、北大歯学部を卒業後、札幌の日之出歯科真駒内診療所に勤務いたしました。とても恵まれた環境だったということもあって、歯科医師は患者とコミュニケーションをとりながら、ニーズに応じた医療を提供することにより、国民のQOLの向上に寄与できる職業として、とてもやりがいのある素晴らしい職業であるものとも今でも思っております。

2 多くの疑問点

しかし、日々の診療では、明らかに杜撰な治療がなされた形跡のある人など、非常に問題のあるケースも少なくありません。また、多くの現場で、医療事故になる前の些細なミスや患者・スタッフとのトラブルなどが少なからず発生していることを知りました。保険制度や診療報酬の問題も、理屈では説明できない部分が多く存在し、この業界がいろいろな面で理不尽な世界であることを認識してまいりました。

3 行 動

私は、このまま自分の大好きな臨床を続けていくことでも、一歯科医師として充実した人生を歩んでいけたものと思います。しかし、様々な問題を認識するにつれ、目の前の患者さんの幸せを思って診療を続けるだけでなく、これまでの経験を下に、異なるアプローチから、医療機関側・患者側の区別なく、より多くの人たちを幸せにするためには何ができるかと思うようになりました。歯科界に足りない分野で、歯科界の様々な問題について、一歯科医師として、

そして、10年余の一般歯科臨床経験のある弁護士として、取り組んでいきたいと思うに至ったわけです。

4 弁護士として

北大法科大学院を経て、運良く司法試験に合格しました。現在、おかげさまで、歯科業界の仕事のみならず、様々な分野について、弁護士として活動させていただいておりますが、いろいろな業界の方々と接する機会が多く、以前よりもとても視野が広がったように感じております。もちろん、少しずつではありますが、よりよい歯科界を構築していくような活動を行っています。そのような中で、弁護士になってから、法律相談も含めていろいろな歯科医師の先生のお話を聴かせていただく機会も増えてまいりましたが、ここ最近は患者さんの声を聴く機会も徐々に多くなってまいりました。「いいものはいい」「悪いものは悪い」と当たり前のことがしっかり言えるような活動をしてまいりたいと思っております。

5 想 い

今までいろいろなことがありましたが、ここまで辿り着くことができたのも偏に周囲の方々の協力あってのことだと思っております。このことは、これからも同じだと思っております。木を見て森も見ろ。これまでの経験から、複眼的な視点から物事を捉え、かつ、俯瞰した物の見方を行うことが少なからずできるようになってきて、いろいろなことの本質が見えてくるようになってきたものと思っております。もっと

も、一人でできることは僅かです。今後も、いろいろな方々と協力し合い、かつ、向上し合い

ながら、志高く、ブレずに柔軟に活動してまいりたいと思います。

ウメオ大学歯学部（スウェーデン王国）訪問記

歯学研究科臨床教育部門

井上 哲

【はじめに】

平成26年3月4日から9日にかけて、横山敦郎教授（有床義歯補綴学）とともにスウェーデン王国ウメオ大学歯学部を訪問する機会があったので、これまでの両大学間の交流の経緯を含めて訪問記として報告します。

ウメオ大学との交流は、1983年Dr. Berit Ardlin（現在准教授：ウメオ大学Dept. of Odontology/Dental Materials Science）が北大歯学部歯科理工学教室（当時太田守教授）に留学していたことに始まります。時を経て、1996年以降、本学歯科理工学講座の亘理文夫教授（現在名誉教授）との交流や2000年の宇尾基弘助教授（現在東京医科歯科大学教授）の留学などがあり、また、先方からは2012年に学術振興会外国人特別研究員として研究者一人（Dr. Wen Kou）を半年間生体理工学教室が受け入れています。このように、本学歯学部とは少なからず関係があり、亘理名誉教授を中心にして双方の学生の交換留学について模索されていました。2013年2-3月には、日本学生支援機構「平成24年度留学生交流支援制度（短期派遣、ショートビジット）

（重点政策枠）」プログラムで、本学歯学部6年生2名を派遣し、学部間教育国際交流プログラムとして実施しています。今回の訪問は、平成25-26年度北海道大学海外教育交流支援事業により、学生2名の訪問と教員の訪問についての渡航が可能となったため行われました。学生は6年生（42期）の森谷康人君と鎌口真由美さんで、既に2月13日から3月11日にかけて滞在しており、彼らの様子を見ることと、今後の両学部間での学生や教員の交流についての相互理解を深めるためにウメオ大学を訪れました。



【2014.3.4（火）】

札幌を3月4日（火）朝一番の成田行きで出発し、成田でスカンジナビア航空へ乗り換え、約11時間半のフライトをエコノミークラスの座席で満喫し、同日午後まずはデンマーク・コペンハーゲンへ到着。そこですぐに乗り換え、夕方6時半頃にスウェーデン・ストックホルム空港へようやく到着しました。空港近くのホテルに宿泊予定で、ホテル専用のシャトルバスに乗り損ねたため、ホテルまでタクシーに乗ろうとしましたが、何人かの運転手に乗車拒否され、次のシャトルバスの時間まで30分間、冷たい風の吹く中、二人寂しく暗い停留所で待つ羽目に……。



【2014.3.5 (水)】

翌朝11時半の便でストックホルムから約1時間のフライトの後ようやくウメオ空港へ着陸。タクシーで15分ほど走り、ウメオ街中のホテルへ到着したのが昼の1時少し前でした。コペンハーゲンやストックホルムに雪はなかったものの、ウメオ空港が近づくにつれ、機内から見た風景は銀世界に変わって行きました。積雪自体は数10cm程度と思われましたが、街中の路肩などには全く雪はなく、日陰になっているようなところに薄ら残っている程度でした。今年の冬はこの百何十年間でもっとも暖冬で、気温も高く雪は少ないとのことでした。ただし、風は強く冷たく、体感温度は氷点下数度程度かなと思われました。また空はドンヨリとした厚い雲に覆われており、青空は滅多にみられず、太陽が顔を見せると学生さんたちが歓声を上げて喜ぶくらい青空や太陽を拝めることは少ないそうです。

ホテルのチェックインは午後2時からだったので、二人で街中をぶらぶら散歩し、たまたま見つけたツーリストインフォメーションで、地図を貰ったり、簡単なお土産を早選手に入れました。

夕方、現在留学中の森谷君と鎌口さんがホテルへ来てくれ、レストランで一緒に夕飯を食べながら、それまでのウメオ生活についてとても楽しそうに話してくれるのを嬉しく思いながら聞き入りました。森谷君は久しぶりに日本人に会って、レストランで思わずボーイに日本語で「すみませーん」と声をかけてしまい、バツが悪そうに苦笑いしておりました。ちなみにディナーは折角なのでトナカイのステーキを注文しましたが、鹿肉に似ているような似ていないよ

うな食感で、想像より柔らかい気がしました。
(上の写真：ウメオ市街)

森谷君は、今回の滞在を経験してみて、まず英語力の必要性をヒシヒシと実感したとのことでした。これには私も同感で、スウェーデン人はスウェーデン語を話すのですが、ほとんどの人は英語も流暢に操ります。ですので、日本人に接するときは、学生でもスーパーのレジでも、レストランでも平気で何の抵抗もなく英語を使います、というか使えます。私が留学していたベルギーは、公用語が3つ（国の上半分がオランダ語、下半分がフランス語、右側の一部がドイツ語）あり、たとえば電話に出たとき相手が喋ってる言語に合わせて即座に対応できるというくらい、日本人からすると離れ業をやっているのけます。ヨーロッパでは数種類の言語が喋れないと希望する職業に就けないと聞いたことがあります。一方、鎌口さんはこちらでの生活が相当気に入ったようで、「帰りたくない」と何度も口にしていました。

(下写真：レストランにて、左から横山教授、鎌口さん、森谷君)





【2014.3.6 (木)】

朝8時、ウメオ大学歯学部長Margareta Molin Thorén教授が自らのBMWでホテルまで迎えに来てくださり、10分くらいのところにあるウメオ大学まで連れて行ってくださいました。学部長の部屋で日本とスウェーデンの大学や歯科事情を少し話した後、Dr. Anders Berglund（准教授：Dental Technicians Programme）と共に、学生の診療室や専門医用の個室診療室を案内して頂いた。

（上写真：学生診療室風景）

患者さんがびっしりと入っている様子ではなかったものの、和やか？な雰囲気の中で治療しているのが印象的でした。中には、診療室のユニット上でファントムを使って練習している学生も見られましたし、また、CAD/CAMなどの最新鋭の設備も導入されており、北大との違いを感じ、大変羨ましく思われました。また、教員の診療室はスペシャリストの診療室としてすべて個室になっており、各人に与えられていました。

昼食はThorén教授、Berglund准教授とともに、車で街中のレストランで頂いたのち、大学へ戻り、午後は交換留学についてのディスカッションを、Thorén教授、Berglund准教授に加え、国際渉外担当のDr. Catharina Österlundと行いました。平成26年度秋頃にはウメオ大学からの学生と教授を北海道大学へ招聘したいと伝え、前向きに検討していただけることとなり、さらに、今後もこのような交流を深め継続していきたいと双方で確認しました。ウメオ大学と北海道大学は昨年大学間国際交流協定を締結し



ているので、歯学部同士の交流は問題なく進められそうとの感触でありました。

（上写真：ウメオ大学構内で、左から筆者、Thorén歯学部長、Berglund准教授、横山教授）

ディナーは、Thorén教授、Berglund准教授に加え、Anders Wänman教授（Clinical Oral Physiology）、Malin Blundin准教授（Dept. of Endodontology：森谷君と鎌口さんがホームステイさせて貰っている先生）と共に、1週間前にオープンしたばかりのレストランで歓待していただいた。

【2014.3.7 (金)】

午前8時30分にThorén歯学部長が車でピックアップしてくれ大学へ。まず9時から予定されていた学位審査（Defence）を見学させていただいた。審査対象は「Healing of endosseous implants with different surface characteristics in grafted and nongrafted bone- Clinical and experimental studies」で、前夜一緒に会食したWänman教授のところの大学院生の研究でした。20-30人の先生方や家族？の前で研究成果を発表し、いろいろな質問を受ける会で、スウェーデン語でしたのであまり理解できませんでしたが、スライドは英語でしたので視覚的にはなんとか付いていけました。途中で退席したのち、Thorén教授の大学院生が、何日か前の研究成果報告会（年に一度開催）で話した研究内容を紹介してもらいました。チタンの粉末の起炎作用に関する研究で、インプラントが専門の横山先生からもいくつか質問とアドバイスがあり、その院生は的確に答えていました。



(上写真：大学病院)

昼食は30年前に北大歯学部へ留学経験のある Dr. Berit Ardlin（准教授：Dental Materials Science）と、さらにたまたま出会った森谷君と共に、大学内のレストランでご馳走になった。

その後はArdlin准教授にDental Materials Scienceの施設を案内していただいた。

そしてThorén教授と共に大学を離れ、我々の宿泊しているホテルに近い場所にある、大学の一施設のArt instituteを訪問し、係りの人達に中を案内・説明してもらいました。スウェーデンはデザイン先進国であり、このInstituteはフェラーリ（イタリア）やトヨタが車のデザインを共同で開発製作しているとのことでした。

夜は森谷君と中華料理を食したのですが、冬とは思えないくらい雨脚がかなり強くなっていたのが印象的でした。

【2014.3.8（土）】

帰国の日、朝7:50の便に乗るため、フロントへ降りて行ったところ、横山教授が何やらフロントの女性と口論していました。我々のホテル代はすでに日本の代理店に支払っており、そ



の書類をチェックインの時に提示し了解してもらった筈なのに、この日の担当者は別人であり、支払いを済ませないとチェックアウトさせない、と主張しているようでした。たまたま私がその代理店の連絡先を書いた紙を持っていたので一件着きましたが、外国旅行をすると、予想外のところで予想外のことが起こるということを実感いたしました。無事タクシーで空港へ向かい、便に間に合いました。これまでの3日間は曇りや雨ばかりの暗い天気でしたが、なんとこの日は奇跡的な晴天。この青空を見ることができたことに大満足して、長い長い帰路についたのでした。

(上写真：ウメオ空港での晴天)

【最後に】

今回のこの訪問が両大学学生の継続的な派遣・受け入れ、また教職員の相互交流の新たな契機となることを望んでいます。現在、今秋に予定しているウメオ大学の教員や学生の派遣・受け入れについて相互に連絡を取り合い調整中であり、それがぜひ実現し、密度の濃い国際交流が継続していくことを切に願っています。

北海道大学病院歯科診療センターのご案内

最近、歯に関して気になることはありませんか？ もしあれば、北海道大学病院の歯科外来をご受診下さい（健康保険証をご持参下さい）。皆様の受診をお待ちしております。定期的な歯の健康診査や歯石の除去、歯に関する相談だけでも歓迎いたします。

なお、当院では平成26年6月から新来予約制を導入しております。受診される場合は原則として事前予約が必要です。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

○事前予約の方法

- ・電話にて予約する

〈予約受付専用電話番号〉 011-706-7733

〈予約受付時間〉 平日9時00分～16時00分（なお、翌日の予約受付は15時00分まで）

※矯正歯科については、電話を受けた7日以降の予約となります。

※紹介状に記載されている当該歯科医師の診察を受けられない場合もありますので、ご了承下さい。

※電話予約の際は以下の内容を確認させていただきます。

1. 氏名
2. 性別
3. 生年月日
4. 連絡先（住所・電話番号）
5. 症状（診療科）
6. その他（当院での受診歴や紹介状の有無など）

※紹介状がなくとも予約受診できますが、その場合、初診料の他に特定療養費制度に基づく特別の料金として、3,240円を自費（保険外料金）でお支払いいただくこととなりますので、ご了承願います。

○歯科診療センターのご案内

☆第一診療室（2階）

予診室

☆第二診療室（2階）

小児・障害者歯科（TEL 706-4355） 小児と知的障害者の歯科治療と口腔管理

☆第三診療室（3階）

口腔内科（TEL 706-4349）

口の粘膜の病気の治療、口腔ケア

口腔外科（TEL 706-4349）

顎や口の中の外科治療

矯正歯科（TEL 706-4352）

歯ならびやかみ合わせの治療

歯科放射線科（TEL 706-4356）

放射線治療前後の口の中の管理

顎関節治療部門（TEL 706-4386）

顎関節症の治療

顎口腔機能治療部門（TEL 706-4388）

顎変形症、口蓋裂患者の総合的治療

口腔インプラント治療部門（TEL 706-4391）

人工歯根による歯の回復

歯科手術センター・歯科麻酔科（TEL 706-4345） 歯科治療のための麻酔管理、ペインクリニック

☆第四診療室（4階）

歯冠修復科（TEL 706-4346）

新しい材料を用いた、むし歯の治療

義歯補綴科（TEL 706-4346）

入れ歯による、かみ合わせの回復

高齢者歯科（TEL 706-4358）

高齢者の歯の治療、口腔管理

口腔総合治療部

☆第五診療室（5階）

予防歯科（TEL 706-4342）

定期歯科健診と予防処置、口腔ケア全般

歯周・歯内療法科（TEL 706-4343）

歯の根の治療、歯周病の治療

冠橋義歯補綴科（TEL 706-4343）

冠、ブリッジによる、かみ合わせの回復

口腔総合治療部

☆グループ系専門外来

口臭外来（予防歯科 TEL 706-4342）

歯ぎしり外来（歯周・歯内療法科 TEL 706-4343）

摂食、嚥下機能外来（口腔内科 TEL 706-4349）

審美歯科外来（歯冠修復科 TEL 706-4346）

口臭でお悩みの方

歯ぎしり、くいしばりでお悩みの方

摂食、嚥下障害のある患者さん

歯や歯ぐきの着色、変色の治療

編集後記

今年も広報誌第14号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。立場上、毎年広報誌の編集に携わっていますが、紙面内容や新企画採用にいつも頭を悩ませています。そこで今年から広報誌の対象読者を歯学研究科所属ではない一般の方々と明確にて原稿依頼を行いました。一般の方々から「歯学研究科・歯学部ではどんなことをしているのだろう？」という素朴な疑問に答えるために、歯学部学生からの記事、研究科所属の教室紹介も本号から新たに企画しました。そして何と言っても今回の目玉原稿は北大歯学部26期卒業で歯科医師・歯学博士であり、現在、札幌市中央区で弁護士事務所を開業されている小畑真先生からの「歯科医師から弁護士へ」のメッセージであると思います。小畑先生にはご多忙のところ快く原稿をお引き受け頂き、この場をお借りして御礼申し上げます。

本誌に対する皆様からのご意見、ご要望などがございましたら、是非、当委員会までお知らせ下さい。
(2014年7月 広報委員会委員長 土門卓文)

皆様のおかげで、この広報誌も第14号を発刊できましたことを心より感謝しております。歯学研究科の耐震のための改築が次々と完了し、平成27年度には完了になる予定です。また、北海道大学もグローバル化に向け変革が進みつつあります。その中で新しい情報を発信していくことは重要であり、少しでも貢献ができればと思いつつ努力しております。また、歴史を残すという役割もあり今年の出来事など振り返ってもらい、思いを寄せて頂ければ幸いです。
(広報委員会編集人 金子知生)

第1号から編集に従事していますが、正直なところ「もう14号か。早いなあ」という印象です。この14年間で歯科を巡る状況もいろいろ変わりました。中でも「がん患者のための医科歯科地域連携」は大きな変化です。その背景として、2012年の第2期「がん対策推進基本計画」で「口腔ケア」や「歯科医師との連携」などの重要性が明記されたことがあります。北大病院でも新しい歯科外来診療棟が医科外来診療棟や入院病棟との距離が近くなったこともあり、がんの手術療法に加えて化学療法や放射線療法、緩和ケアなどを受けている患者さんの口腔管理を積極的に行えるようになりました。この分野は今後ますます発展していくものと期待できます。

私達は、既存の歯科医学に加え、こうした医科との連携分野に関しても学生にしっかり教育していく必要があることを痛感させられています。
(広報委員会編集人 兼平 孝)



改築した歯学部棟の廊下



北海道大学大学院歯学研究科・歯学部・歯科診療センター広報

第14号 2014年（平成26年）8月発行
北海道大学大学院歯学研究科・広報委員会

編集人 兼平 孝・金子 知生
発行人 土門 卓文
印刷・製本 株式会社正文舎